

授業を支える集団づくりの充実を目指す学校へのアプローチ

— センターのシンクタンク機能を活用した学校支援 —

主 幹・指導主事 一瀬 英史
副主幹・指導主事 服部 有美
主 査・指導主事 榛原砂穂理
副主査・指導主事 小野 圭

キーワード 学級づくり・授業づくり 校内研究の活性化 アンケートの利活用

I 主題設定の理由

令和2年度の山梨県学校指導重点では、確かな学力の育成、豊かな心の育成、健やかな体の育成等教育活動の根底として教師と児童生徒との信頼関係及び児童生徒相互のよりよい人間関係を育てる土台となる、学級・ホームルーム・学年集団づくりに取り組むこととなっている。

こうした背景をもとに研究協力校（以下協力校という）は、学習指導と生徒指導を両輪と考え、学級経営の充実をひとつのテーマとして研究を進め、目指す児童像に向けて各種調査や分析を実施し、それを踏まえた授業づくりや学級づくりを目指している。

一方、山梨県総合教育センター（以下、センター）はシンクタンク機能を生かした学校支援が求められている。「学校教育を支援する確かな情報発信源としての山梨県総合教育センター」という基本方針を具現化するために、「教育研究」「学校支援」「教育情報収集・提供」の機能連携による、「知の拠点」を目指している。そして、国や本県の教育施策を踏まえ、本県の学校教育の現状に即した今日的課題を把握し、学校教育を支援することを目的とした実践的な研究を推進し、併せて調査研究の普及・啓発、学校や教職員に対する相談支援を行うことを方針としている。

そこで、本研究では教育相談に関する校内研究に取り組んでいる学校に関わることが学校支援としていかに有効であるか、について研究していく。

II 研究の目的

『学級経営の充実を目指す協力校に対して、学校が実施する調査の分析や授業改善のための助言や研修、専門分野の外部講師による学習の機会を提供することが学校支援として有効である』と仮説を立てた。これにより校内研究が活性化し、学習指導や学級経営が充実するのではないかと考えた。

III 研究の方法

研究の目的の達成に向けて、本研究チームは、以下のような取組を学校支援として取り入れた。

【児童の実態把握のための取組】

- ①小学校低学年対象の学級集団に関するアンケートの作成
- ②学校が実施する「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U」（川村ら2004 以下、「Q-U」という）等の分析と結果の共有

【教員に対する助言・研修・学習機会の提供】

- ③アンケートの分析結果を生かした授業づくりのための指導案や授業への指導・助言
- ④よりよい人間関係づくり、授業づくりのための学習会の講師派遣

【本研究に対する協力校の評価】

- ⑤教育センターの学校支援に対する評価を調査するアンケートの作成とその分析

IV 研究の経過・取組

1 協力校のニーズに応じた支援

（1）校内研究計画に沿った支援

協力校では研究主題を『関わり合い 高め合う子どもたち』研究副主題を「考える力・表現する力・学び合う力を高める授業づくり・集団づくり」と設定した。また、目指す児童像を「情報や考えなどを的確に理解し、判断の根拠や理由を明確に示しながら、自分の考えを述べることができる児童」としている。この他、研究を通して求める学級像、研究を通して求める授業像、研究を通して求める児童像も設定している。

協力校の研究内容として、子供たちが「わかる授業」「楽しい授業」を実感できるような授業実践に取り組む。一人一人が学ぶことに興味・関心をもち、見通しをもって粘り強く取り組み、お互いの考えを聴き合いながら自己の考えを広げ深められるような授業づくりに取り組む。そのためには、

根底となる学級経営の充実が大切であり、各種調査の分析を踏まえた学級づくりや学力向上の基礎となる人間関係づくりについての研修を進めたいという要望に沿い、示された研究計画に沿って、1学期は各種学習会、夏季休業には学習会と学校で毎年行っている「QU」の分析、2学期はそれを生かした授業実践を行うこととなった。

(○はセンターが関わった校内研究会)

回	月・日	曜日	形式	内 容
1	4・22	水	全体	今年度の研究の方向性について 各ブロックの研修についての希望と研究授業について
2	5・18	月	全体	・「総合教育センター研究協力校」について ・新型コロナウイルスによる学校の長期休校に伴う児童支援について
3	5・20	水	全体	特別な教科道徳の授業と評価の在り方について
4	6・17	水	全体	「簡易版Q-U学級づくりシート」について
5	6・24	水	全体	困難や悩み、ストレス等への対処方法について (SOSの出し方教育について)
6	7・29	水	全体・ブロック	・指導案の形式について ・ブロックごとの研究
7	8・18	火	全体・ブロック	・特別な支援を必要とする児童・生徒のつまずきを読み解く視点について ・学級づくりシートを使った分析について
8	9・2	水	ブロック	研究授業①及び授業研究会 (北村 2年国語) 研究授業②及び授業研究会 (徳本 4年国語)
9	9・16	水	ブロック	研究授業③及び授業研究会 (橋本 1年算数) 研究授業④及び授業研究会 (秋山 4年道徳) 研究授業⑤及び授業研究会 (土屋 6年社会)
10	10・14	水	ブロック	研究授業⑥及び授業研究会 (中島久 1年国語)
11	10・16	金	ブロック	研究授業⑦及び授業研究会 (前橋 3年道徳)
12	11・18	水	ブロック	研究授業⑧及び授業研究会 (三原 2年道徳) 研究授業⑨及び授業研究会 (齊藤 5年算数)
13	11・25	水	ブロック・個	研究授業⑩及び授業研究会 (村松 さくらんぼ自立活動) 研究授業⑪及び授業研究会 (小泉 6年英語)
14	12・2	水	全体	研究授業⑫及び授業研究会 (藤原 5年道徳 拡大校内研)
14	1・20	水	ブロック	ブロックの研究のまとめ
15	1・27	水	全体	各ブロックの研究結果の発表、研究紀要作成について
16	2・17	水	全体	校内研のまとめと反省、来年度の研究の方向性について

図1 協力校 校内研究年間計画

学習会5回と研究授業3回、拡大校内研1回に関わり、その他、研究授業のための指導案への指導・助言、低学年アンケートの作成と集計・分析、「QU」等の分析を行った。

(2) 各種学習会への講師派遣

校内研究の計画に沿って、協力校の要請内容に従って学習会を5回行った。内容は以下の通りである。

- ①5月18日 講師 センター指導主事
「新型コロナウイルスによる学校の長期休業における児童支援」
- ②5月20日 講師 センター指導主事
『「特別な教科道徳」の指導と評価の在り方』
- ③6月17日 講師 センター指導主事
『「QU」を活用した集団づくり』

④6月24日 講師 山梨大学 川本静香准教授
(教育相談グループのアドバイザー)

「SOSの出し方教育について」

⑤8月18日 講師 センター指導主事

「特別な支援を必要とする児童生徒のつまずきを読み解く視点について」

学校における子供たちの生活支援や年度の後半に向けた授業づくりにつながる内容となり、研究を深める一助となった。

(3) 校内研究会への支援

協力校より「付箋を用いた研究会の進め方」を校内研に定着させたいという依頼を受け、複数の研究会の方法を提示する中で、協力校は「指導案拡大シート法」を選択した。指導案拡大シート法とは、あらかじめ拡大コピーしておいた本時指導案(展開)に直接、付箋を貼る手法である。(参照:教職員研修のための手引きより NITS)

指導案拡大シート法を用いた研究会を9月より10月・11月・12月(拡大校内研)と合計4回行った。毎回、研究会では低・中・高学年ブロックに分かれて研究討議を行い、研究授業を行ったブロックにセンター指導主事も立ち会い、研究会の進め方の支援を行ってきた。

付箋紙への書き方について以下のよう設定した。

- 青 → 成果
- 桃 → 改善点
- 黄 → 質問

研究会を重ねるごとに、付箋が増えるだけではなく、付箋に書かれてく

る内容にも変化がでてきた。研究討議の柱に沿う内容が増えたこと、また桃色付箋紙が増えてきているのがわかる。回数を重ねることへの慣れもあるが、付箋を用いたワークショップの意義の理解が進んだことによる変化である。

同時に、研究討議の司会も教職員で行った。一過性のものにするのではなく、自分たちで研究会を継続していくことができることを意味する。回数を重ねるごとに、参加者全員が同じ量を発言するようコーディネートされ、研究討議が深まる様子が見て取れた。



図2 9月研究会



図3 11月研究会

(4) 児童向け各種アンケートの分析支援

学級づくりや学力向上の基礎となる人間関係づくりにおいて、協力校では、3年生から6年生まで、「QU」を活用している。「QU」は、学級の状態や児童個々における友人との関係、学習意欲、学級との関係について把握することができる。しかし、校内研究等で分析をし、それを学級づくりに生かすところまでには至っていない。そのため、校内研究を進めるにあたって、全学年で同じように分析をし、学級づくり等に生かすため、1、2年生については、新潟大学附属小学校の「学級力アンケート」を参考に、学級での様子を把握できる「じぶんやクラスについてのアンケート」(以下、「低学年アンケート」)をセンターで作成した。肯定的感情や子ども同士の関係性、学習意欲を見る8項目で作成されている。

- ①わたしは、クラスにいるとたのしい。
- ②わたしは、もくひょうにむかってがんばっている。
- ③クラスみんなはわたしのいっていることを、きいてくれる。
- ④わたしはいろいろなかんがえをみんなにいうことができる。
- ⑤クラスみんなにはなしかけやすい。
- ⑥クラスみんなはこまっているときにたすけてくれる。
- ⑦わたしやクラスみんなは、がっこうやクラスのきまりをまもっている。
- ⑧わたしはいっしょうけんめい、べんきょうしたいとおもう。

2つのアンケートの結果を以下の観点で分析した。

- ①「QU」の結果や学級の様子から、担任が学級の様子を報告し、参加者は状況を把握する。
 - ②参加者でルールやリレーションの確立度などを見立て、それをもとに、担任が今後のクラスづくりの方針としてルール形成またはリレーション形成のどちらかを選択する。
 - ③参加者全員よる具体的な手立てを提案する。
 - ④提案されたものまたは担任が考えているものや提案されたものを融合したものなど、担任が実行するものを3つ決めて参加者に伝える。
- センター指導主事が、6月の学習会で「QU」の活用方法等について確認をし、分析方法について

研修した。結果が戻ってきた8月に低・中・高の学年ブロックごとに指導主事も1名ずつ参加して分析を行い、9月からの各教科の授業や今後の学級指導に生かすこととした。

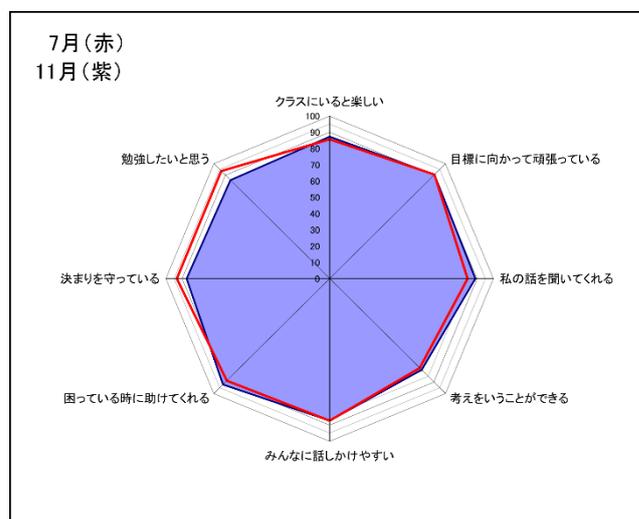


図4 「低学年アンケート」の分析結果(例)

(5) 指導に生かす具体的対応

協力校は「低学年アンケート」,「QU」の分析結果を生かして、学級づくりや授業づくりに取り組んだ。センターは、9月16日に1学年算数「3つのかずのけいさん」、10月16日の3学年国語「すがたをかえる大豆」「食べ物のひみつを教えます」、11月18日2学年道徳「金のおの」、12月2日公開研究会5学年道徳「ロレンゾの友達」について指導案への指導・助言を行った。また、当日の研究授業にはセンターの教科の指導主事と教育相談の指導主事2名で参加し、教科からの助言とクラスづくりからの助言を行った。道徳に関わる部分では、山梨大学のアドバイザーである田中一弘准教授に指導案や授業への指導・助言を依頼した。

2 集団づくりを通じた研究授業支援

(1) 9月 研究授業(1学年算数)

授業者は「低学年アンケート」より、[みんなに話しかけやすい・困っているときに助けてくれる・考えを言うことができる]の3項目が低い傾向から、新しい集団への不安を抱えている児童が複数名いると考えた。また、自分や友達の考えを、伝えたり聴いたりすることも不十分であると感じたことから、授業内での交流を仕組む必要性を感じた。アンケートの分析後、授業内で様々な形式で交流を仕組む中で、児童の自信と安心感につなげる有効な交流がペアであると考え、ペアでの交流

時間を可能な限り設定した。

本時は上記の取組の延長として設定している。学級全体での意見交流に向けて、3つの数の加減混合の計算の仕方をペアで交流することにより、自分の考えに不安をもつ児童に自信と安心感がもてるよう配慮した。同時に、ペアでの意見交流や、学級全体での意見交流を通して、立式の過程や計算過程の学びを深めることにもつながっている。



図5 ペア学習の様子

ペア学習を取り入れることにより、考え方や計算方法に不安をもつ児童にとって、有意義な場であったことから、今後も継続して設定していく。自分の考えを説明したり、考え方を聞いたりする活動を通して、学びを深めている。

(2) 10月 研究授業 (3学年国語)

3年生の国語の研究授業の中で、授業者は集団づくりに向けた取組として、「QU」と「学級力アンケート」を活用した。

「QU」結果を受けて授業者は、「話を最後まで聞く」ためのスキルを身に付けさせる工夫や、主体的に学ぶ工夫、互いを認め合い、高め合うことのできる工夫を取り入れた。具体的には、「聞き方のスキル」「話し方のスキル」を可視化し、日常生活での指導と合わせて取り組んだという。

「学級力アンケート」とは、授業者指導案によ

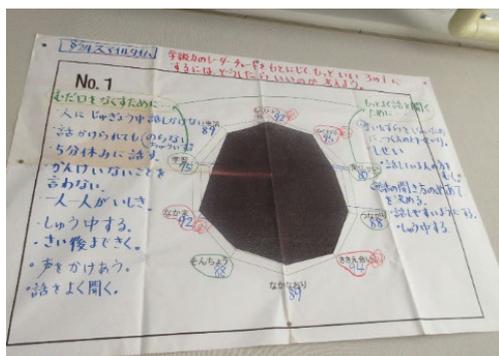


図6 日常生活での指導の可視化の工夫

れば「早稲田大学教職大学院教授田中博之氏の提唱する『学級力』を測るためのアンケートのことである」。また学級力とは、「学び合う仲間としての学級をよりよくするために、子供たちが常に支え合って目標にチャレンジし、友達との豊かな対話を創造して、規律を守り安心できる環境の下で協調的な関係を作り出そうとする力のことである」としている。

授業者はアンケート結果をレーダーチャートで図示し、それを見ながら教師と児童がともに仲間づくりの成果と課題について話し合い、さらにこれからの学級力向上の取組のアイデアを出し合う「子供会議(スマイルタイム)」を開催した、という。これは、授業者自らが導入した取組であり、すでに教員が実践しているこうした主体的な取組も実施されていた。

授業者の発話は比較的小さな声であった。これにより児童は授業者に対してより注意を向けている様子が観察された。また児童は発言する者へ姿勢を向け、発言が終わるまで聞いている態度も観察された。さらに、授業者が児童の発言を掲示物と照らし合わせる様子も観察でき、可視化する指導法や日常生活での指導と関連付けている指導の様子も観察された。

(3) 11月 研究授業 (2学年道徳)

授業者は7月に実施したアンケート分析を生かし、集団づくりに取り組んできた。この学級の集団像を低学年ブロックで分析した際に、学習意欲が高い反面、自分の考えを表現することに苦手意識を感じている児童、自分の話を聞いてくれるという実感が持てない児童がいることが分かった。その点を学級課題と捉えた授業者は〈リレーションの形成〉を集団づくりの方針とし、児童一人一人の承認感を高める取り組み、具体的には「聞く」



図7 目標可視化の取組



図8 研究討議の様子

ことに焦点を絞っていった。学級全体でアンケート結果に対する意見を出し合い、「話を聞くときは話している人の方を向く」ことを目標に、達成を可視化するなどして継続的な取組を行っていった。

研究授業で児童らは、自分の心を可視化する「心メーター」を使って考えを表現することに取り組んだ。授業者は、登場人物に起きた出来事を児童一人一人が自分事として捉えられるよう、過去を振り返らせたり、授業者自らの体験を語ったりして、児童の考えを深めていった。

研究授業後の研究会は、低・中ブロックが2グループに分かれ、指導案をベースに意見を交換していった。授業で用いた「心メーター」の活用や発問の在り方などについて活発な意見が出され、授業者・参加者がそれぞれの経験則を共有し、学び合う場となった。また、消極的な児童であっても周囲の意見をしっかりと「聞く」ことができていたとの意見も出され、授業者が児童を認めるタイミング等、学級づくりへの取組についても話し合われた。その後、アドバイザーである山梨大学准教授田中先生からの指導助言の時間を設け、ねらい達成につながる中心的な問いから授業を構想する「授業構想シート」の活用等、道徳の授業づくりに関する理解を深めた。

3 拡大校内研究会（12月2日）

（1）研究授業（5学年道徳）

この学級では、「QU」の結果を受け、リレーション形成、承認感を高める取組に重点を置いてきた。これから最高学年となることを見据え、頑張りを認め合える集団、協力したり相談したりしながら活動できる集団を目指し、具体的には、学校行事での一人一役、教え合いや聞き合いを意図的に授業に仕組む、学級での係・当番活動の充実などに取り組んできた。それに加えて、「学級力アンケート」を年に数回実施し、児童自身が成果や課題点を視覚的に捉え、改善に向けた意識付けや取組につなげている。また、体験を通して自分や他者への気づきを深めるとともに、コミュニケーション能力の向上を目的に、構成的グループエンカウンターを積極的に取り入れるなど、集団づくりを重要課題として取り組んでいる。

研究授業は、外部から約60名が参加する中、感染症対策に万全を期して体育館で行われた。友達とはどんな存在か、「友情」を深めるために大切な

ことは何かを考えることをねらいとし、児童が自分の意見をもとに他者の意見との違いや共通点を見出しながら、互いの考えを広めたり深めたりしていった。参加者のアンケートでは、「授業の中で「QU」がどのように生かされているのかを見とることができた」「教師と児童の信頼関係により、多様な意見を言える場になってよかった」など、集団づくりを意識した授業の成果に言及する意見が見られた。



図9 研究授業の様子

（2）研究会

研究会も研究授業同様、体育館での実施となった。これまで校内研究会で討議を重ねてきたことを生かし、協力校の教員がリーダーとなり、拡大指導案と付箋を用いて討議を行った。各グループに協力校の先生方、参加者、センター指導主事が入り、8グループ（5～7名）構成で実施した。指導案の授業観察のポイントである『友情』を深めるために大切なことは何か、自分なりの考えをもつことができたか。「ペアやグループで交流することにより、お互いの考えを広めたり、深めたりすることができたか。」を、グループ討議の視点として示したことで、テーマから逸れたりせず、校種や立場を超えて考えを深めることができた。その後、グループで話し合われたことを、リーダーが発表する形で全体共有した。参加者からは、「付箋を用いた校内研究はとても有効な方法」「話し合いが活性化する」「授業の流れに沿いながら付箋を用いて話し合うことで考えが整理しやすい」「発問の内容を先生方と考えていく中で学びが深まった」などの肯定的意見が多数寄せられた。山梨大学准教授川本先生からは研究授業に関して、授



図10 各グループのまとめ

業者と子供とのリレーションが形成され、子供が安心する授業づくりができていたとの指導・助言があった。また、センターとの連携や集団づくりの意義についての話もあり、参加者は理解を深めることができた。

(3) 拡大校内研究会を終えて

拡大校内研究会後も協力校では集団づくりをベースにした授業づくりが続いている。拡大校内研究会は、これまでの取組やその成果の一端を示す場ではあるが最終地点ではない。「低学年アンケート」、「QU」等の2回目の結果を受け、これまでの集団づくりを振り返り、目標の再設定を行った。

例えば、〈リレーション形成〉に取り組んだことで成果が出た学級では、新たに〈ルールの確立〉の課題が見えてきたため、これまでの取組を継続しつつ、ポイントが下がってしまった項目については、「できているときに積極的に声掛けをして意識させる」ことで改善を図っている。また、学校生活に対する意欲が下がるなど気になる児童がいることがわかった学級では、個別対応などを通して個々の自己肯定感を高める実践を行っていくという。このように、協力校ではアンケート結果を学級づくり・集団づくりのヒントとして活用し、確かな見通しをもった学級運営の実践を継続中である。

参加者のアンケートからは、「生徒指導と学習指導をリンクさせることはとても大事であると感じた」「センターの力と学校現場の利がうまくかみ合っている。客観的な視点から意見をもらい、学級づくり・運営・子供との関わり方などアドバイスをもらえることに、とても安心して子供たちに向き合える支えになると感じた」「校内研の進め方などをセンターから支援してもらえるのはありがたい」といった意見が見られた。



図11・12 研究会の様子

4 研究協力校アンケートの実施

本研究の取組が現場の教員にとって確かに役立っているのか、支援となっているのかどうかについて明らかにするために「研究協力校アンケート」を作成した。

手続きと結果は以下の通りである。

(1) 手続き

まず教職員に、校内研究やセンターとの協働に対する印象について調査した。6月の学習会の際に、付箋を使って無記名で自由に意見を書かせた。

次に、KJ法により教員の発言をカテゴリー化し、そのカテゴリーと、研究チームの視座を合わせ、12項目のアンケートを作成した。

(2) アンケート項目

- ①指導に役立つ具体的な方法が身につく、日頃の指導に生かすことができる。
- ②大学講師や外部講師から専門知識を生かした話や最新情報を聞くことができる。
- ③全職員で意見や考え、進め方などを共有できる。
- ④教職員が個別のニーズを気軽に相談できる機会になっている。
- ⑤教育センターが講師や指導主事を派遣してくれるので進めやすい。
- ⑥※教育センターとの協働や連携の必要性は理解できるが、それ以上に負担が大きい。
- ⑦※教育センターが関わることで、自分たちのペースで研究できない。
- ⑧※コロナ禍の状況での研究は負担感や不安が大きい。
- ⑨この研究は、「わかる授業」「楽しい授業」を支える集団づくりとして効果がある。
- ⑩この研究は、子供同士の関わり合いを良くするのに効果がある。
- ⑪集団づくりにこの研究を生かしている。
- ⑫この研究によって校内研究が活性化している。

アンケートへの回答は、5件法（5点：とてもそう思う、4点：そう思う 3点：どちらでもない 2点：そう思わない 1点：全くそう思わない）で回答させた。

なお、※は逆転項目を示している。

(3) アンケート結果

調査は8月と12月に実施し、有効回答数は16名であった。以下に各項目の8月と12月の平均値を示す。⑧以外のすべての項目で平均値が増加した。

表1 研究協力校アンケート結果

有効回答数 16人

設問	8月	12月
①指導に役立つ具体的な方法が身につく、日頃の指導に生かすことができる。	4.1	4.5
②大学講師や外部講師から専門知識を生かした話や最新情報を聞くことができる。	4.6	4.8
③全職員で意見や考え、進め方などを共有できる。	4.3	4.7
④教職員が個別のニーズを気軽に相談できる機会になっている。	3.5	3.9
⑤教育センターが講師や指導主事を派遣してくれるので進めやすい。	4.1	4.7
⑥※教育センターとの協働や連携の必要性は理解できるが、それ以上に負担が大きい。	3.1	3.6
⑦※教育センターが関わることで、自分たちのペースで研究できない。	2.4	2.6
⑧※コロナ禍の状況での研究は負担感や不安が大きい。	3.9	3.8
⑨この研究は、「わかる授業」「楽しい授業」を支える集団づくりとして効果がある。	4.1	4.4
⑩この研究は、子ども同士の関わり合いを良くするのに効果がある。	4.1	4.4
⑪集団づくりにこの研究を生かしている。	4.1	4.4
⑫この研究によって、校内研究が活性化している。	4.3	4.5

V 研究の成果と課題

1 成果

(1) 研究仮説に対する教師の変容

研究仮説『学校が実施する調査の分析や授業改善のための助言や研修、専門分野の外部講師による学習の機会を提供することは学校支援として有効か』に対し、教職員アンケートの結果を踏まえてまとめる。アンケート全体として肯定的な評価を得られた。特に設問5「教育センターが講師や

指導主事を派遣してくれるので進めやすい」は4.1→4.7へ増加、設問9「この研究は「わかる授業」「楽しい授業」を支える集団づくりとして効果がある」は4.1→4.4へ増加し、平均値を比較すると1%水準で有意差が確認できた。協力校の教職員が研究の進めやすさや、研究の効果を実感する中で、学校支援が有効であったと考えられる。

また拡大校内研へ向けて、協力校の校内研究会支援も、自校の授業づくりや研究に取り組む意欲・雰囲気の変容につながっていったと考えられる。

(2) ニーズに応じた支援

協力校のニーズに応じた次の①～③の支援を行った。

①講師派遣

研究会における講師を、学習会で5回派遣した。その中でも、新型コロナウイルスによる学校の長期休校に伴う児童支援として、5月に指導主事が学習会を行った。学校のニーズにいち早く対応した。このような学習会を通して、指導主事等が学校訪問をすることに対する学校側の敷居を低くすることができたと考える。前述したようにアンケート項目5の「教育センターが講師や指導主事を派遣してくれるので進めやすい」は4.1→4.7へ増加している。

②授業支援

低学年への「低学年アンケート」、中・高学年への「QU」を教職員全員で分析することにより、学級への関わりについて具体的な対応を考える場面を設定することができた。そしてそれぞれの経験を生かして児童への関わり方のスキルを全員が獲得する機会が得られた。また、全体で児童支援の方向性を共有できた。その結果として、すべての学級において、リレーション形成、もしくはルール形成を学級経営の軸とし、現在も取組が継続している。

③研究会支援

上述(IV 1 (3))の通り、研究会の進め方の支援により、教職員全員で共通理解を図ることが可能となった。また、今後も協力校自ら、研究会を継続して進めることができる。

2 課題

(1) 協力校への支援について

教職員アンケートの結果より、「教育センターと

の協働や連携の必要性は理解できるが、それ以上に負担が大きい」は3.1→3.6へ増加し、「コロナ禍の状況での研究は負担感や不安が大きい」は3.9→3.8へ推移した。つまり、今年度新型コロナウイルス感染症拡大防止への対応に追われている学校において、負担感があつたと考えられる。

一方で、前述(V1(2)①)したように、講師派遣について、研究協力校の利点もある。

様々な支援を考え、取り組んだ結果でもあるが、結果に対する改善点を、今後チームとして検討していく必要がある。

(2) 今後に向けて

研究を通して、『協力校のニーズに応じて』支援を行うことが前提となっている。そのため、ニーズに応じて講師や指導主事の訪問を行ってきた。その支援を通して、協力校が得られたことやセンターが得られたことは大きい。しかし、その上で学級経営の支援の在り方として、他の手法も考えられたのではないかと。例えば、構成的グループエンカウンターを用いて、学級経営でのポイントなどを皆で共有する機会を設けるなど、協力校内での意見交流も考えられる。支援の在り方として、協力校のニーズに応える形で、最善の支援の在り方を模索していく必要がある。

3 研究を通して

協力校より、研究を通して以下の意見をいただいた。

① 学校長より

- ・学校の要望に沿って、支援を施してくれるこの制度は心強かった。
- ・学習指導と生徒指導は教育の両輪という考え方を全体で共有できたことは、大変有意義だった。

② 教職員より

- ・センターの先生方や大学の教授から、講義を受けたり、指導助言をいただいたりすることにより、研究を深めることができた。
- ・授業後の研究会のもちかたについて学ぶことができ、教職員の共通理解を図ることができた。
- ・低学年では、学級力をはかる独自のデータを作っていただき、活用することができた。

③ 研究部より

- ・複雑な手続きをすることなく、指導主事に来ていただけたことは、とても有難かった。
- ・感染症対策のための負担が大きい中での研究に、不安もあった。

4 来年度に向けて

来年度も、協力校と共通理解を図る中で、校内研究への支援を進めていく。協力校のニーズに応じる中で、センターのシンクタンク機能を生かした支援をしていきたい。

今年度の研究を通して、県下の学校にセンター研究の理解・利活用を図りたい。

【引用・参考文献】

- ・河村茂雄, 粕谷貴志, 武蔵由佳, 藤村一夫 (2004) Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド 小学校編 図書文化社
- ・新潟大学附属新潟小学校HP「附属新潟式学級力の取組」
<https://www.fuzoku-niigata.jp/gakyu/>

【研究協力校】

南アルプス市立白根東小学校 校長 笹本 忠彦

【山梨大学連携研究会アドバイザー】

山梨大学 准教授 川本 静香
准教授 田中 一弘

【総合教育センター研究アドバイザー】

相談支援部 部長 原田 孝雄